

第16回 新日鉄音楽賞
受賞者インタビュー

「新日鉄音楽賞」は今年で16回目を迎え、フレッシュアーティスト賞をソプラノ歌手の木下美穂子さんが、特別賞をチェリストの青木十良さんが受賞された。今回の「紀尾井ホールで会いましょう」では、受賞されたお2人をお招きし、受賞の感想や活動への思いなどについて伺いました。

新日鉄音楽賞受賞おめでとうございます。
まず、受賞の感想をお聞かせください。

木下 ご連絡をいただいたときは大変驚きました。ソプラノ歌手の佐藤美枝子さんや松本美和子先生など、尊敬する先輩方が受賞されている大変権威ある賞ですので、「私で良いのだろうか」とプレッシャーを感じたほどです。コンクールに自分で応募して賞をいただいたことはありますが、新日鉄音楽賞は皆さんに選んでいただく賞ですから、音楽家として歩いていく上で大変光栄なことだと思っています。

青木 私は演奏活動と同時に譜面の分析などの地味な研究をしていますので、賞にはまったく縁がないと思っていました。このたびはまさに青天の霹靂、すばらしい賞をいただき大変驚いています。これからは気を引き締めて仕事に向かわなければならないと思っています。

現在の活動状況についてお聞かせください。

青木 私は譜面をよく読み、その上でソロやデュオの演奏、CD録音などを行っています。現在90歳ですが、年をとるにつれてますます仕事が増えてきました。昨年は1年で7公演行い、秋に集中していたので大変な目に会いました(笑)。CD録音はとても時間のかかる仕事ですね。普段から毎日5時間ほどチェロの練習をしていますが、今の録音機械はとても性能が良く、どんな小さな音も拾ってしまうため、無駄な音を出さないよう徹底的に練習します。

木下 現在は日本での公演が多いのですが、オペラの本場であるヨーロッパでも歌っていきたくらいローマに拠点を置いて活動しています。昨年は日本でオペラ3本に出演したこともあり、5～6回ほど日本とイタリアを往復して1年の半分以上を日本で過ごしました。今年は日本で2月に『ラ・ボエーム』、7月には『蝶々夫人』を再演させていただきます。ヨーロッパではフランス・ボルドーでのリサイタルが決定しています。

それぞれ、専門にされている音楽の魅力を教えてください。

青木 音楽についてはいろいろと研究していますが、結局私はチェロの音に魅せられたのだと思います。チェロは低い音域も出せますし、怒りや威厳などを表現することができます。そして人を不快にさせる音域を持った楽器でもあります。そこからいかに人の心を打つ音を出すかという苦労が魅力です。「開放弦」と言って、弦を指で押さえずに弾く音があります。この開放弦を弓でスッと弾いたときに、

一つ一つを大切に。
心に響く音楽を届けたい。

プロフィール/
きのした・みほこ
1971年生まれ。二期会会員。イタリア在住。大分県立芸術短期大学卒業。武蔵野音楽大学卒業。同大学院修了。二期会オペラスタジオマスタークラス修了。2001年第70回日本音楽コンクール声楽部門第1位・松下賞。第37回日伊声楽コンクール第1位、第32回イタリア声楽コンクール・シエナ大賞を相次いで受賞。国内三大声楽コンクールの三冠王として話題を呼ぶ。2002年サンタ・マルゲリータ国際声楽コンクール第1位などイタリアでも第1位を獲得。2002年小澤征爾指揮『ドン・ジョバンニ』ドンナ・エルヴィーラ、広上淳一指揮同オペラ同役で出演、好評を博す。同年、イタリアのサンタ・マルゲリータ オペラフェスティバル、また2003年ベオグラード国立歌劇場で『蝶々夫人』のタイトルロールを演じ喝采を浴びた。同年、二期会オペラ『蝶々夫人』で東京デビュー。2004年レナータ・スコットのマスタークラスに招聘される。2005年二期会オペラ『椿姫』、2006年2月『ラ・ボエーム』に出演。7月『蝶々夫人』に出演予定。



フレッシュアーティスト賞/ソプラノ歌手

木下美穂子さん

吸い込まれるようなほれほれする音を出せることがあります。私はその音が忘れられません。一種の変わり者かもしれないですね。きっと生命が終わる直前までチェロを弾いていると思います。

木下 オペラは声だけではなく、楽譜に書かれていることを演技でも表現できますし、衣装、舞台、照明、演奏、さまざまな方の協力で作られる総合芸術です。オペラ歌手としての経験は浅いのですが、私はオペラのとりになってしまう。自分がオペラの舞台上で歌えることが嬉しくて仕方ありません。『蝶々夫人』では、他の作品と同じよう



二期会「椿姫」のヴィオレッタ役



二期会デビューとなった蝶々夫人

いつも同じ演奏はしたくない。 これからも1歩ずつ進歩し続けたい。



**プロフィール/
あおき・じゅうろう**
1915年生まれ。15歳の頃アーノルド・フィッシャーからチェロの技を受け、第2次世界大戦終結の6カ月前から現在のNHKに入り、放送を通じて音楽活動を開始。戦中には山田耕筰氏、戦後は近衛秀麿氏と共に活動する。同時期、シュタフオンハーゲン四重奏団の一人として奮闘。室内楽やソロ活動における本邦初演曲が多く、その功績は高く評価されている。1964年から現在まで桐朋学園大学や高校のチェロ科、室内楽科で講師を務め、財団法人ソルフェージュ・スクールには1950年から現在まで講師、理事として勤務、優れた音楽家を多数輩出。1990年のカルロ・ゼッキと組んだパッハのガンパ・ソナタの全曲演奏以来、演奏活動を再燃。90歳を超えてなお各地でソロ活動を行う。2002年、2005年紀尾井ホール主催公演「グレート・マスターズ」に出演。2004年には日本芸能実演家団体協議会（芸団協）より功労賞を贈られる。CDには「パッハ：無伴奏チェロ組曲第6番」などがある。

特別賞/チェリスト

青木 十良さん

に楽譜を読み込んだり歌の勉強をする他に、2カ月間ほど日舞を習いに行きました。日本人が日本の舞台上で『蝶々夫人』を歌うのに、あまりに不自然な感じが恥ずかしいと思ったからです。歌以外の勉強が必要なのは大変なことですが、オペラの魅力はさまざまな表現が結集している点だと思います。

演奏者としての感動とは、どのようなものなのでしょうか。

木下 私は最後に死んでしまう役を演じることが多いこと



紀尾井ホール「グレート・マスターズ」での演奏より



長女の青木紀子さんとともに

新日鉄音楽賞：1990年新日鉄創立20周年と「新日鉄コンサート」放送35周年を記念して設けられた音楽賞。日本の音楽文化の発展と将来を期待される音楽家の方々の一層の活躍を支援することを目的としている。

フレッシュアーティスト賞：将来を期待される優れたアーティストを対象とした賞。技術だけでなく、音楽性、将来性を重視し、広い範囲から選出。

特別賞：演奏家に限定せず、幅広いジャンルのなかから、音楽文化の発展に大きな貢献をはたした方に贈る賞。

もありますが、毎回泣いてしまいます。最後の幕は、練習の段階から涙が出てしまうほどです。でも、感動しているだけでは良い舞台にはなりません。レナータ・スコット先生に「冷静でなくてはいけない。でも入り込まなければいけない」とよく言われます。一流の音楽家は、役になりきっている自分と、冷静に舞台全体を見ている自分のバランス感覚がしっかり持てるのだと思います。

青木 私も演奏中に泣いたことがあります。各楽団の首席を集めて、近衛秀麿さんが指揮をされた新日鉄コンサートのときです。ベートーヴェンの交響曲第3番「英雄」の第4楽章で単純に音階が上がっていくフレーズなのですが、なぜか突然ドーンと涙が出てきました。その後同じ曲を聴いても、「あれ？私が泣いたのはどこだろう？」と思うほど何も感じないから不思議です。きっと心が高揚する響きがあるのでしょうね。私たちの演奏も、実に冷静に演奏をコントロールしている自分と感動している自分、ふたりの人間がいます。自分が感動に浸ってしまって骨組みが失われた音楽は聴けたものではありません。オペラも演奏も同じなのです。



1月20日、(財)新日鉄文化財団理事長である当社千速代表取締役会長を訪問し、受賞の挨拶とともに歓談された

今後の抱負をお聞かせください。

木下 とにかく皆さんの心に響く音楽を目指したいと思っています。そして、日本とヨーロッパに活動の基盤を作りたいと思っています。どんな舞台でどんな役をしたいという夢もありますが、まずは一つ一つの歌に心を込めることを大切にしていきたいと思っています。声はメンタルな部分にとっても影響されてしまうので、気持ちをいつもポジティブに、心を平和に保つことが大切です。舞台経験を重ねることで、メンタル的な強さを身につけて、いつでもベストな歌を聴いていただけるようになりたいと思っています。青木 これまでと同様、ご注文の品を納期までに調えるだけで手一杯です(笑)。昨年、ショパンのチェロソナタの注文が重なり、ドイツでピアノの勉強をしている娘が伴奏をしましたので、1回目は娘に合わせて演奏し、2回目は私の考えを少し入れて演奏し、3回目はさらに私の考えを入れて演奏しました。そして3つの演奏を弟子たちに聴いてもらって感想を述べてもらいました。私は同じ演奏はしたくありません。これからも演奏するごとに進歩し続けたいと思っています。